

これからの児童英語教育(1)

—子ども英語教育センターでの挑戦—

子ども英語教育センター

アレン 玉井 光江

川 村 睦 子

深 野 陽 子

I はじめに

公立小学校で初めて英語活動が導入されたのは平成4年度であり、大阪の二つの市立小学校と中学校で実験が始まった。それ以来徐々に研究指定校の数が増え、少なくとも各都道府県で1校は研究校に指定され研究が続けられた。その間、文部省の指導とは別に都道府県、市町村レベルでも独自に研究が続けられた。それらの研究報告では児童、教師、保護者ともに英語活動に肯定的であった。その後10年間の実験期間を経て、文部科学省（以降、文科省）は平成14年度より小学校から高校までの課程において「総合的な学習の時間」を新設し、小学校ではその時間を使って「国際理解教育」に取り組むことを決めた。この「国際理解教育」という枠組みの中で公立の小学校児童に対して初めて「外国語会話」と称し英語活動を導入することが可能になった。文科省の調査によると平成14年度に外国語活動を実施した学校の割合は全体の61.4%であったのに対し、15年度では88.3%となり公立の小学校の9割ちかくがなんらかの形で英語活動を行っていることになる。就学児童の99%が公立に通う日本の現状では、この公立小学校への英語活動の導入はそれ以降の学校教育における英語指導に大きな影響をもたらすことになる。

河村健夫前文部科学大臣は「小学校における英語の必修化」について触れ、今年度4月に発足した中央教育審議会初等・中等教育の外国語専門部会でその是非を検討するように依頼した。小学校での英語必修に反対する人たちは、カリキュラムや現職教員への研修および教員養成の不備、他教科の時数への影響、中学校との連携などを理由に慎重にするべきだと主張する。また、元来「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」における「外国語会話」と規定されているのにもかかわらず、英語の技術的な教育のみが行われている現状に警鐘をならす教育者もいる。とりわけ全国22,526の公立小学校で英語が必修として導入された場合、約14万人の指導者が必要となってくるにもかかわらず、現職、およびこれからの教員養成についてほとんど手付かずというのは大きな問題だと私たちは考える。

しかし、賛成派は国際言語としての英語の特異性を考慮に入れ、子どもの特性を活かした音

声中心の言語教育を早くから行うことが日本の未来にとって必要であり、アジア諸国でも小学校から英語教育に取り組む国が多くある中、いち早く英語を教科化するべきであると主張する。賛成派の人の中には小学校での英語が必修化されると、そのあり方が中学・高校・大学での英語教育を再考するきっかけになると考えている人もいる。

本稿においては、前述のような公立小学校における「国際理解教育の中での外国語会話の中での英語活動」という観点ではなく、英語を言語として教えるという観点から児童、または幼児に対する英語教育について意見を述べることを目的としている。文京学院大学の附属機関として4分の1世紀以上にわたり活動を続けてきた子ども英語教育センター（Child Language Education Center：これ以降 CLEC）での実践を通して、これからの日本における英語教育のあり方について論考したい。

II これからの児童英語教育が目指す方向

1980年代以来、英語教授法は、それまでの伝統的な目的言語だけを教えるという狭い意味での言語教授法からコミュニケーションを促進させ、学習を効果的に進めるため目的言語を使用し、4技能を統合的に教える教授法へと推移している。この教授法の変化は子どものクラスだけでなく大人のクラスの中でも起こっているが、特に子どもの英語教育の現場での変化に焦点を置いて考えるとその特徴を下の4点にまとめることができる。

1. 小学生を対象とした英語教育において重要な4つの点

(1) 児童中心の授業—学習者を受動的な存在としてではなく、自ら発見し、学習を深めていく能動的な存在として認め、授業を行うことが求められている。英語教育を全人教育の一環として行い、児童を WHOLE としてみていくことが大切である。

(2) 合科的アプローチ・トピック中心の授業—各教科と関連づけて授業を行っていく。子どもが各教科で学習、または体験したことがらを積極的に英語活動の中に導入していくことが言語学習にとっても大変効果的である。このような各教科の横断的、または研究校においては、総合的なカリキュラム作りに関して多くの試みが行われている。

(3) 意味のある、また本物のインプットを与え、児童どうしが自然に交わることができるような授業—授業中の活動が児童にとって意味のある、また理解可能なものであれば、彼らは授業に興味をしめす。教師はトピックを選ぶ際、彼らの知的好奇心を刺激するようなものを選ぶ必要がある。また、児童どうしが積極的に関わることは言語を習得する上においても大変重要なことである。授業での活動、またタスク(課題)は、それが行われている過程で、なるべく児童どうしのインターアクションが起こるように工夫する。

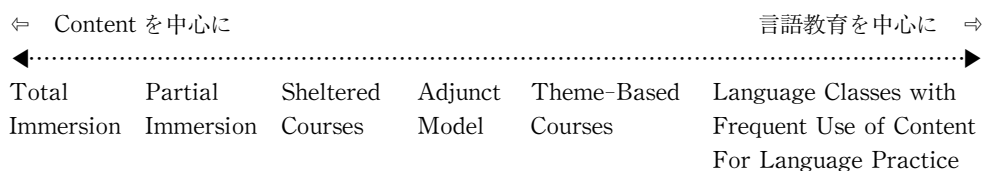
(4) 全体から部分へ—今までは学習者の負担をなるべく少なくするために言語材料を小さな単位に分けて提供するほうがよいと考えられていた。従って文章全体を文に分解し、文を単語に分解し、また単語を音素に分解し、教えていく方法がとられていた。しかしながらこのような方法では言葉が話されている状況を把握することができず、全体像を描き出すのは至難の

業である。文脈から離れたところで単語の意味がわかったとしてもそれは本当の意味での言語習得には結びつかない。児童に全体像を提供するためにも部分ではなく全体をはじめから提示することが大切である。このように児童がわかる範囲の言語材料を「全体」または「分割しない」状態で与えることは大切であるが、そのためには教師は児童がすでに知っていることを正確に把握していることが不可欠である。

2. コンテントを中心としたアプローチ（これ以降 Content-based approach）

以上のような4点を十分に考慮し、CLECではContentを中心とした言語教育アプローチをとっている。このアプローチでは「言語はそれを使って何か他のこと（多くの場合は教科）を学ぶときに最も効率的に学習される」という言語教育観に従って教育がなされる。contentという言葉自体、英語教授法の歴史の中では様々な使われ方がされてきたが、ここでは次のように定義される。“Content, in this interpretation, is the use of subject matter for second/foreign language teaching purposes. Subject matter may consist of topics or themes based on student interest or need in an adult EFL setting, or it may be very specific such as the subjects that students are currently studying in their elementary school classes.” (Snow, p. 303) このアプローチは適応されている学習環境、プログラム、目的、学習者数などによって様々なモデルができあがるが、すべてのモデルに共通するのは言語教育と教科教育の統合である。Snow (2001) はこれらのモデルを言語教育と教科教育の統合度によって分類し、図式化した。これは content-based で進められている言語プログラムを総括的に理解するのに役立つものである。

図1 Snow の Content-based Language Teaching : A Continuum of Content and Language Integration



日本で英語を学習する幼児・児童を対象に週1回1時間という言語教育環境において、CLECでは実際のところContentを中心としたプログラムといえども右端の「言語練習のためになるべく教科的な要素を入れる」という程度に留まる。しかしながら、後述する具体的なレッスンの構成を見ていただければ理解してもらえると期待するが、従来行われてきた英語教育とは大きく違う授業が展開されている。

III CLEC について

実際の授業プランを紹介するまえに、レッスンの内容をより深く理解してもらうため

CLEC の沿革とクラス形態について記述する。

1. CLEC の概要、歴史

CLEC は2003年4月に「英語および日本語の言語習得に関する理論的および実践的研究、さらに実験的教育を行い、文京学園が設置する各学校の語学教育の向上に資すること」を目的に設立された。CLEC には「CLEC 英語教室」が併設されており、年少児～小学6年生（3歳～12歳）までの子どもたちを対象にした英語指導が行われている。また、そこは児童英語教育科目（「児童英語指導」「児童英語教材研究」「児童英語教育実習」）を履修する短大生、および学部生の実習の場ともなっている。

CLEC 英語教室は、文京語学教育センター（Bunkyo Language Education Center : BLEC）に併設されていた「BLEC 子ども英語教室」を前身としている。BLEC 子ども英語教室は1978年に開講され、2003年に「CLEC 英語教室」に名称を変更し、今年度で設立26年を迎える。また、1998年にはふじみ野キャンパスでも同様の教室が開講され、今年度で設立6年を迎える。私たちは早くから幼児・児童の英語教育の重要性を認識し、実践的な活動を展開してきた。

2. CLEC での授業形態と受講する子どもたち

現在は、年中児（4歳児）から小学6年生（12歳）まで約100名の子どもたちが週に1回1時間、年間34時間の授業を学内に併設の教室で受けている。年少児（3歳児）は週に1回30分、年間21回、10.5時間の授業を受けている。年少児は移動に時間を要するなどの理由から現在は文京幼稚園の教室を借りて運営されている。クラスは少人数制で4名から、多くても10名で運用されている。

本郷、ふじみ野両教室とも文京幼稚園の幼児とその卒園生が大半をしめており、年少から小学6年まで9年間を通じてCLECで学習をする子どももいる。近年の傾向としては、小学校での国際理解教育の影響からか、子どもならびに保護者、両者の英語に対する興味が高くなってきている。しかしその一方、小学校高学年になると中学受験の学習塾等に通うために、やむなく退会せざるをえないという問題を抱える児童が年々増加している。

CLEC では設立以来、また前身のBLEC 子ども英語教室の時代から一般的な教科書を使わず、各教師が独自の教材を開発し教育を続けている。担当する子どもたちの年齢、構成人員、また彼らの興味・関心にあわせて授業を進めるようにしている。前述したようなContent-basedで授業を構成するため、各教師は常に子どもたちの学習能力、学習ストラテジーなどにも十分配慮し、それぞれの学年で（日本語を通して）身につけていくacademic skills（教科を学習するために必要な技能）の発達にも注意している。

また、本論文では取り扱わないが、CLECでは各年齢にあわせて、徹底したりテラシー教育を行っている。日本で学習を積む子どもたちにとってその第一言語である日本語の力をうまく転移させ、中学校以降の学習にも大きく役立つように、過去10年にわたって開発されてきたりテラシープログラムはCLECならではの大変特徴的なものである。

Ⅳ. 幼稚園児から小学校児童に対する具体的なレッスン

ここでは CLEC で行われている (1) 幼稚園児, (2) 小学校低学年, および (3) 小学校高学年を対象にした指導について具体的にレッスンプランを提示しながら説明していく。すべてのレッスンが前述した content-based の教え方にその理論的な基礎をおいている。

1. 幼稚園児を対象としたレッスン

CLEC では幼児の発達の観点から、次の点を念頭におき指導を行っている。年少児においては、9月頃までは保護者の協力なく学習を進めることは難しく、また横（友だち）の関係より、縦（指導者）の関係性が強い。年中児は集中力が持続するようになり、10分くらいの活動を続けることができる。また年少児に比べるとかなり集団で行動が出来るようになる。年長児に関しては、子どもどうしのグループ活動がさらに可能になる。さらには競い合う活動を好むようになる。幼児を指導する場合には、このような英語指導以外に子どもの認知的また社会的な発達を知ることが大きな要素となる。

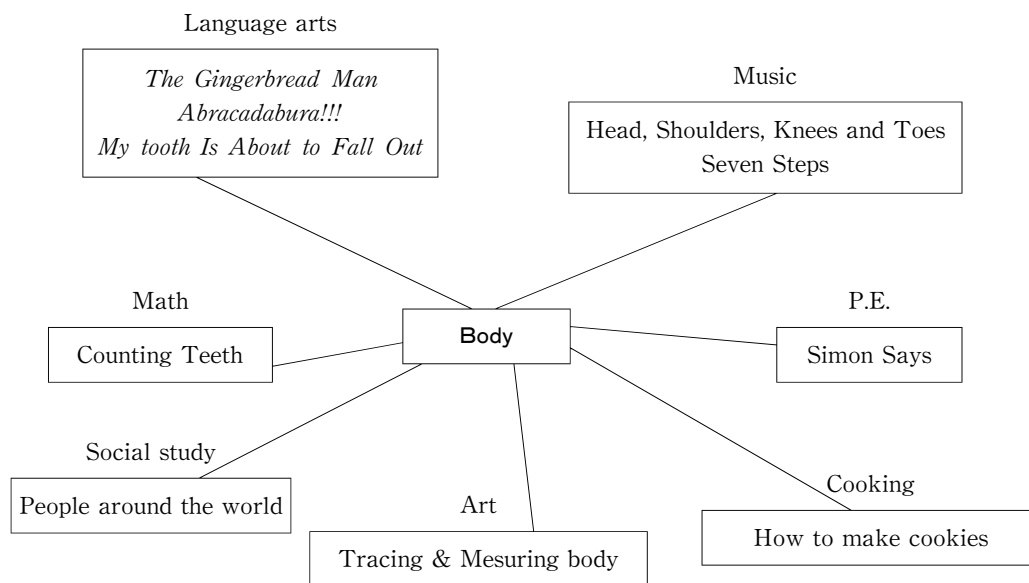
幼児への英語指導の最大のメリットは、幼児が英語（の音）を違和感なく受け入れることが出来るということにあるように思われる。CLEC の幼稚園児の指導においてはこの点を十分に生かし、「英語の音とリズム」を楽しみながら、絵本を使った授業を多く行っている。絵本を使うことの理由は、幼児がその登場人物になりきり、想像上の世界に思いをめぐらし物語そのものを楽しむことができるということ、さらには物語が英語で語られても、絵がその解釈を助け、自然な形で英語のインプットが可能となることにある。文科省の幼稚園教育要綱では、幼稚園においては「生きる力の基礎となる心情、意欲、態度」が育つことが目標に掲げられている。また、その具体的ねらいの一つである「言葉」においては、経験したことや考えたことなどを自分の言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養うとある。また、「表現」においては感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにするとある。絵本を使っての指導は、幼児にとっては英語という第二言語であっても、言葉の学習のみならず、心身の発達課題にもそくしていると言えるであろう。

続いて学習歴3年の年長児、5～6名のクラスの実践的指導例を挙げていくことにする。

「自分の体を知り、他者にも興味を持ち理解しようとする」を目的に“Body parts”をテーマに以下の5回のレッスンを行っている。これらレッスンにおける言語発達の目標は次の通りである。①絵本 *The Gingerbread Man* の内容を理解し、講師との joint reading を楽しむことができるようになる。さらには長いストーリー (*My Tooth Is About to Fall Out*) に興味を持ち聞くことができるようになる。②物語の中で使われる“Come back!” “Stop!”等を理解し、教室の中、生活の中で応用できるようになる。③英語での指示に従い（モデルに沿いながら）様々な活動を行うことができるようになる。④Alphabetの大文字を読み、文字を見ながら書くことができるようになる（通年目標）。また、認知発達および社会性の発達からみた

目標は次の通りである。①ペアあるいはグループ活動に積極的に参加できるようになる。②自分の身体について大きさ、長さなどを客観的に知る。③友達にも興味を持つ。④本を通じて外国に住む子どもに興味を持つ。

図2 Body をテーマにしたレッスン構成



次に実際にこれらの活動を行う具体的レッスンプランを以下に挙げる。

Lesson 1

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶, 天気について。 ② Alphabet Song ならびに大文字を読む。	Listen & Speak Listen & Read
<i>The Gingerbread Man</i>	Lg arts Lg arts Cooking	① Gingerbread man の人形を袋に入れ, 何かを当てさせる。 ② 表紙を見せ, Gingerbread man がどこにいるのかを探す。 ③ 表紙の題名をどちらから読むのかについて考える。 ④ 物語を読む。 ⑤ Gingerbread man が何であったかを思い出させる。 クッキーの材料, 作り方について考え, How to make a gingerbread man のチャンツで, クッキーの作り方を真似てみる。	Listen & Speak Listen & Speak Listen & Speak Listen Listen & Speak & Act

	Lg arts & art	⑥ Gingerbread man の絵を描き、文字を書く。	Listen & Draw & Write
Song	P.E.	① Touch your head などの指示を聞き、身体の部分に触る。語彙の導入。	Listen & Act
	Music	② Head, Shoulders, Knees and Toes 歌を歌う。	Listen & Speak

Lesson 2

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶、天気について。 ② Alphabet Song ならびに大文字を読む。	Listen & Speak Listen & Read
<i>The Gingerbread Man</i>	Cooking	① 人形を見ながら Gingerbread man と物語の内容を思い出す。 ② How to make a gingerbread man のチャントの復習。	Listen & Speak Listen & Speak
	Lg arts	③ 子どもらが “Stop, Gingerbread man! Come back, Gingerbread man!” セリフを担当する joint reading 行う。	Listen & Speak
My body	P.E.	① Touch your head. あるいは子どもどうしがペアになり Touch your friend's head などの T.P.R.を行う。	Listen & Act
	P.E.	② Head, Shoulders, Knees and Toes の復習。また、①同様にペアになり、お互いの身体に触れ合いながら歌う。	Listen & Speak & Act
	Art	③ 大きな紙に子どもを寝かせ、他の子どもが身体の回りをなぞる。全員が交互に行う。	Listen & Draw
	Art & Lg arts	④ 顔や洋服を描かせる。MY BODY 等書く。	Listen & Draw & Write

Lesson 3

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶、天気について。 ② Alphabet Song ならびに大文字を読む。	Listen & Speak Listen & Read
<i>The Gingerbread Man</i>	Cooking	① How to make a gingerbread man のチャントの復習。	Listen & Speak
	Lg arts	② Lesson 2 同様に joint reading 行う。	Listen & Speak
	Lg arts	③ 食べられた Gingerbread man を取り戻す。“Come back head!(arm, body, leg)”	Listen & Speak
My body	P.E. & Music	① Lesson 2 同様に T.P.R ならびに歌を復習。	Listen & Speak & Act

	Art	② グループあるいはペアで（紙テープを使用し）、手・足の長さを測り、比べる。	Listen & Act
Storytelling	Lg arts	<i>Abacadabra!!!</i> を読む。	Listen

Lesson 4

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶，天気について。 ② Alphabet Song ならびに大文字を読む。	Listen & Speak Listen & Read
Counting	P.E. & Music P.E. Music & Math Art & Math	① Lesson 2, 3 同様に T.P.R ならびに歌を復習。 ② Simon says “Touch your head”などのゲームを行う。 ④ Seven Steps の歌を聞き，身体を動かしながら 1～10の復習。 ③ 鏡を使って，歯の数を数え，紙にかき出す（上の歯，下の歯を分けて数える）	Listen & Speak & Act Listen & Act Listen & Speak & Act Listen & Act
Storytelling	Lg arts	<i>My Tooth Is About to Fall Out</i> を読み，大人の歯が抜けても，もう新しい歯は生えないことを説明する。	Listen

Lesson 5

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶，天気について。 ② Alphabet Song ならびに大文字を読む。	Listen & Speak Listen & Read
Review	P.E. & Music P.E. P.E. & Music	① 前回までのレッスン同様に T.P.R.ならびに歌を復習。 ② Simon says “Touch your head”などのゲームを行う。 ③ Seven Steps の歌を聞き，身体を動かしながら 1～10の復習。	Listen & Speak & Act Listen & Act Listen & Speak & Act
People around the world	Lg arts & Social study	『世界の子どもたちはいま』の本を使い，自分たちと違う言葉話し，洋服を着，自分たちとは違う生活をしている子どもたちについて話を	Listen

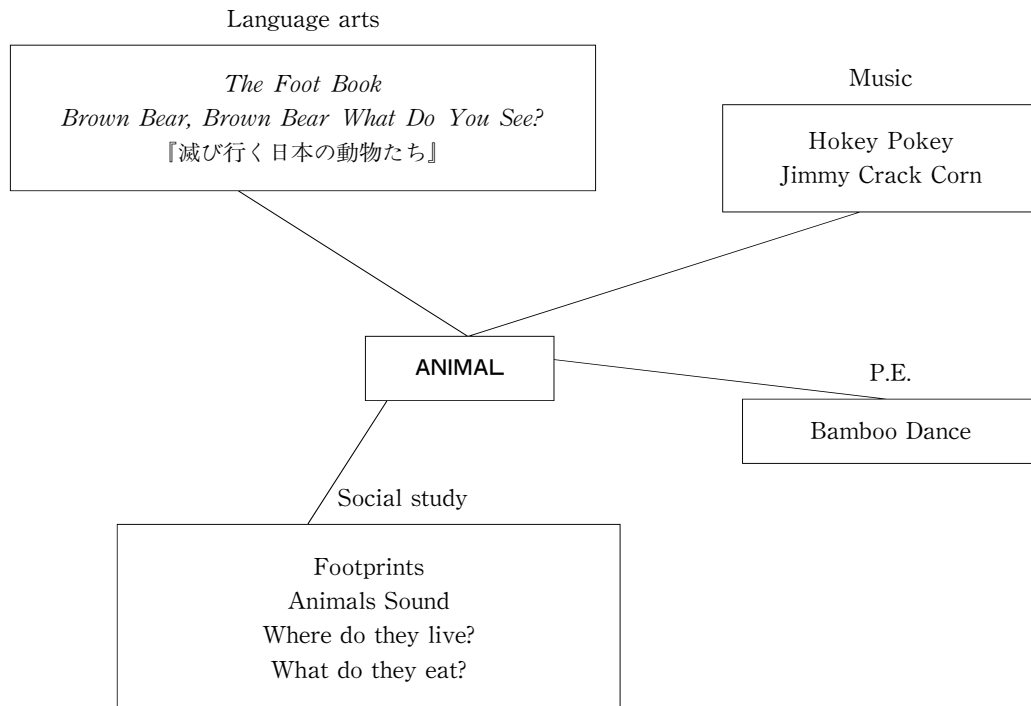
2. 小学校低学年の児童を対象としたレッスン

公立小学校の「総合的な学習の時間」を使っての英会話活動では，リテラシー学習は今現在も消極的であると言える。しかし，CLEC では音声教育だけが単独で動くようなプログラムではなく，言語の4技能をバランスよく指導することを大切にしている。特に小学校低学年の

指導においては、子どもの音に対する感覚を養いつつ、本格的な読みの教育に入る前に、音と文字との関連性を段階的に導入している。また日本語の音体系の中には存在しない rhyme を聞き取り、それを書き表す力を養成することは日本人学習者に多くの利益をもたらす（アレン玉井, 1999）と考え、特に力を入れて指導を行っている。

ここではこのようなりテラシー教育を取り入れた content-based approach の具体的指導例を紹介する。クラスは学習歴約4年の小学2年生、6～8名を対象に「動物の習性と絶滅危機の動物の存在を知る」という目的で“Animal”をテーマに以下の6回のレッスンを行っている。これらのレッスンにおける言語発達の目標は次の通りである。① *The Foot Book* を使用し、rhyme を意識的に学習する。また、本（文字）を読もうとする。② SVO 型（I see a bear. I eat honey. など）を文として理解し、使うことができる。③ what, where, などの疑問文を理解し、それに答えることができる。④ 大文字、小文字を完全に書けるようになるとともに、単語、文章も写しながら書くことができる。（通年目標）学校で学ぶ教科内容とあわせて、① 動物の習性を考え、理解する。② 絶滅の危機に瀕している動物の存在を知り、そのことについて考える力を伸ばす。

図3 ANIMAL をテーマにしたレッスン構成



Lesson 1

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶, 天気について。 ② 既習の歌, チャンツの復習。	Listen & Speak Listen & Speak
<i>The Foot Book</i>	Lg arts Sound Lg arts	① 本をリズムよく読む。 ② Rhyme Game (音のみ) ③ Foot Book の本作り。	Listen & Speak Listen Write
Song	P.E. Music	① Right, Left の確認。 “Put your right hand up!”などの指示を聞き動作を行う。 ② Hokey Pokey を歌う。	Listen & Act Listen & Speak

Lesson 2

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶, 天気について。 ② 既習の歌, チャンツの復習。	Listen & Speak Listen & Speak
Song	P.E. Music	① Right, Left の再確認。 “Put your right hand up!”などの指示を聞き動作を行う。 ② Hokey Pokey を歌う。	Listen & Act Listen & Speak
Foot	Lg arts Sound Social study P.E. Lg arts	① 本の復習。 ② Rhyme Game ③ Footprints—動物とその足跡について考える。 ④ フィリピンを地図で探す。フィリピンの伝統的な踊りである Bamboo Dance を行う。 ⑤ Foot Book の本作り。	Listen & Read Listen Listen & Speak Listen & Act Write

Lesson 3

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶, 天気について。 ② 既習の歌, チャンツの復習。	Listen & Speak Listen & Speak
Song	Music	① Hokey Pokey を歌う。	Listen & Speak
Foot	Lg arts Sound Lg arts	① 本の復習。 ② Rhyme Game (文字をみて違いを確認する) ③ Foot Book の本作り。	Listen & Read Listen Write
Animal	Lg arts Lg arts	① Brown Bear の本を読む。 ② 続けて子どもとの joint reading	Listen Listen & Read

	Social study	③ 動物の鳴き声を聞かせどんな動物かを考える。 T : Children, What do you hear? C : I hear a bird.	Listen & Speak
--	--------------	--	----------------

Lesson 4

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶, 天気について。 ② 既習の歌, チャンツの復習。	Listen & Speak Listen & Speak
Song	Music	① Hokey Pokey を歌う。 ② Jimmy Crack Corn を歌う。	Listen & Speak Listen & Speak
Foot	Lg arts Sound	① 本の復習。 ② Rhyme Game	Listen & Read Listen
Animal	Lg arts Social study Lg arts	① Brown Bear を子どもと joint reading ② 本に出てくる動物がどこに住んでいるのかを考える。 T : Brown bear, where do you live? C : I live in the mountain. ③ 住んでいる場所のワークシートを作る。	Listen & Read Listen & Speak Write

Lesson 5

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶, 天気について。 ② 既習の歌, チャンツの復習。	Listen & Speak Listen & Speak
Song	Music	① Hokey Pokey を歌う。 ② Jimmy Crack Corn を歌う。	Listen & Speak Listen & Speak
Foot	Lg arts Sound	① 本の復習。 ② Rhyme Game	Listen & Read Listen
Animal	Lg arts Social study Lg arts	① Brown Bear を子どもと joint reading ② 本に出てくる動物が何を食べるのかを考える。 T : Brown bear, where do you eat? C : I eat honey. ③ ワークシートを作る。	Listen & Read Listen & Speak Write

Lesson 6

活動	教科	活動内容	技能
Warm up		① 挨拶, 天気について。 ② 既習の歌, チャンツの復習。	Listen & Speak Listen & Speak

Song	Music	③ Hokey Pokey を歌う。 ④ Jimmy Crack Corn を歌う。	Listen & Speak Listen & Speak
Foot	Lg arts Sound	① 本の復習。 ② Rhyme Game	Listen & Read Listen
Animal	Lg arts Social study Social study	① Brown Bear を子どもと joint reading ② ワークシートを見ながら, What do you see? What do you hear? What do you live? What do you eat? の質問に答える。 ③ 『滅びゆく日本の動物たち』を読み, 絶滅の危機にある動物とその原因について考える。	Listen & Read Listen & Speak Listen & Speak

3. 小学校高学年を対象としたレッスン

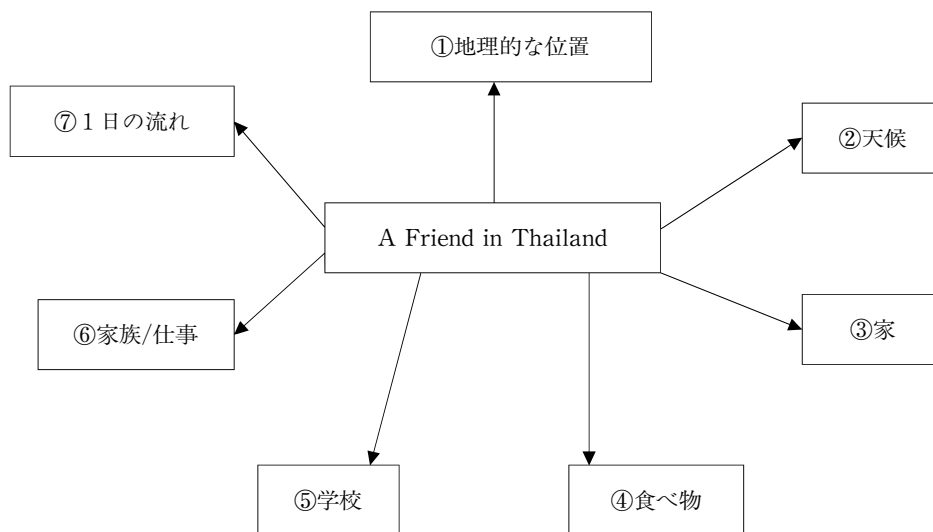
小学校4年生以降になると目の前の世界だけでなく、まだ目にしたことのないものも想像し理解することが可能で、未知の世界に対して興味が大きく芽生えていくときのように思える。この年代の子どもは、就職や昇進のために英語の試験で高得点を取りたいという動機づけがあるわけではなく、また入学試験のためにどうしても英語をやらなければいけないという危機感を持つわけでもない。しかし幼児とは違い、親に連れられるがままに英語教室に来ているという年齢でもない。自分というものを持ち、つまらないものはやらないというはっきりした態度をとるようになってくる。言語教師としては以上のようなことをしっかり認識し、言語指導のみに重点をおくのではなく、彼らにとって、興味もてる話題があるか、楽しいと思える活動があるか、さらに達成感を持つことができるか、という生徒の目線に立つことの重要性を心に留め授業に臨む必要がある。表面的な言語学習ではなく、言語を通じて内容を学ぶことに重点をおく Content-based approach という授業形態で、今回は「A Friend in Thailand」というテーマのもと、国や地域によって異なる生活様式、習慣、特に自分たちの同年代の子がどんな生活を送っているのかを生徒に伝えることを目指し、7つのトピックを紹介する。これらの活動では、①地図を読む、②方角を理解する、③グラフを読む、④大きな数字や数量を表す単位を読むなどの彼らが小学校で母語で学ぶアカデミックスキルも無理のない形で授業の中に盛り込み、彼らの学習過程をより意味のある深いものにしていくことに挑戦する。レッスンプランを立てる際には、常に以下の点に注意する。

- (1) 生徒にとってインプット (Listening, Reading) とアウトプット (Speaking, Writing) の機会ができる限り適切に与えられ、多少母語が入っても生徒どうしまたは生徒対教師という形でも対話をする機会が与えられること。
- (2) アクティビティが生徒を前向きに授業に取り組ませられるような楽しいものであるとともに「意味のある」ものであること。
- (3) できる限り、「本物の」教材を準備すること。

中高学年の授業には、低学年とは異なり、知的好奇心をそそるアクティビティや教材を準備する必要がおおいにあると考える。言われた物に触れるという単純な T.P.R. わけもわからず覚えさせられる歌などを導入すれば、教師の力量にもよるだろうが、冷めた目で仕方なくやる生徒を多く見る結果になるであろう。

まず初めに、A Friend in Thailand というテーマのもと、以下のように①から⑦までのトピックを決めた。授業で扱う順序も示した番号順としたい。これは最終的な⑦に行くまでにタイの子どもたちがどういった環境で生活をしているのか背景的な知識を持っていたほうが、より理解が深まると思うからである。⑦に行く前でも、地理的なことを学習してから、天候へ、天候を学んでから生活様式へとつながりのある移り方を心がけ、自然と理解が深まることを期待した。

図4 A Friend in Thailand をテーマにしたレッスン構成



次に上の図で示したトピックから①②④⑦を取り出し、具体的なレッスンプランを紹介する。ここで選んだ4つのトピックは、トピックへの入り方や生徒への動機づけという点でそれぞれ異なる方法を提案してみたつもりである。教材やアクティビティだけの提案ではなく、生徒の授業に対する興味を引き出すのに有効と思われる方法も提案してみた。なお、ここで想定している学習者は小学校中学年以上であり、週1回60分の授業を受けている。コミュニケーション能力で表せば、初級レベルではあるが、低学年からのリテラシー教育によって文字を書くこと、またアルファベットから想像して単語を読む力を持っていることを言及しておく。

各レッスンプランには低学年のものとは異なり、教材、到達目標、授業内で使用する英語表現、語彙も示した。これにより提案した活動がどんな物を使い、どんなインプットやアウトプットを期待しているのかわかりやすくなっている。

(1) 地理的な位置を教える授業から——ゲーム感覚の「楽しい」と思われる要素を比較的多く入れた案

トピック	① 位置 (日本とタイがどこにあるのか)	
教材	地球儀ビニールボール, 世界地図, 世界地図パズル (世界地図のカラーコピーなどをパズルのように切った物), ハンドアウト	
到達目標	大陸の配置が地図上でどうなっているか大まかに理解し, タイと日本がどこにあるのかを地図などを使いながら英語で説明できる。	
Linguistic form	Where is...? It is in...	
Vocabulary	国, 大陸の名前, 方位, 赤道	
活動	活動内容	技能
Warm up	① 教師が地球儀のビニールボールを一つのグループに投げ, 受け取ったグループは教師の言った国を限られた時間で見つける。	Listening (L) Speaking (S)
Lecture	② 世界地図を使い, 大陸, 方位を学習。日本, タイの位置を確認。	L Writing (W)
Group work	③ 世界地図パズル	L, S, Reading (R)
Individual/Pair work	④ ワードリストと完成させた世界地図パズルを参考に, ハンドアウトの色塗りと空欄補充。	L, S, R, W
Wrap-up	⑤ ハンドアウトの答え合わせと発音確認。	L, S, R, W

(ここでは L は Listening, S は Speaking, W は Writing, R は Reading を示す)

(2) 天候を教える授業から——身近な本当の情報を利用した案

トピック	② 気候 (タイの気候と日本の気候を比べる)	
教材	タイと日本の週間天気予報, 年間平均気温と降水量などのデータ (Yahoo Kids や外務省の web-sight などのリンクから情報収集)	
到達目標	グラフやデータを読み, 日本とタイの気候について英語で質問, 応答ができる。	
Linguistic form	What is the temperature of...? It is ...degrees C/F. How's the weather in...?	
Vocabulary	天候, 寒暖表現 the average rainfall/temperature for	
活動	活動内容	技能
Warm up	① 各グループごとに今現在の教室の温度を当てさせる。温度計を使い実際の気温を見つめる。教師は華氏と摂氏の両方で正解を伝え, 2 種類の表し方があることを伝える。	L, S, R, W
Lecture	② 日本の天候のデータを基に天気用語, 寒暖表現の確認。	L, S, R, W

Pair work	③ information-gap (北極, 南極, 赤道直下の国, その他いくつかの代表的な国の平均気温が未記入になっている簡易地図のハンドアウトを相手に聞いて完成させる)	L, S, R
Group work	④ 国名が隠された気候についての2枚のデータシートがどちらがタイのものか日本のものかを当てる。そう思った理由も述べる。	L, S, R, W
Wrap-up	⑤ 教師はタイのデータについて英語で説明する。子どもはデータを見ながら聞き, 正解を確認。そのデータを使って, ハンドアウトを最終的に完成させる。発音確認。	L, S, R, W

(3) 食べ物を教える授業から——体験することを活かした案

トピック	④ 食べ物 (タイの代表的な食べ物を知る)	
教材	タイフードの写真 「ミステリアスセット」(オレンジジュース, しょうゆ, 塩, 砂糖, 小麦粉, レモン汁, ソースなど少量ずつのせた番号のついた小皿のセット)	
到達目標	代表的なタイ料理の味を英語で理解し, また気候や地域性の食べ物への影響に気づくことができる。	
Linguistic form	What does this/it taste like? It looks (like)/smells (like)/tastes (like)... It is...	
Vocabulary	味覚表現	
活動	活動内容	技能
Warm up	① 先生の持っている白いもの(塩)が何か, どんな味がするか考える。	S
Lecture	② 味見をし, look, smell, taste (like)表現を学習。	L, S
Group work	③ 各グループ「ミステリアスセット」(オレンジジュース, しょうゆ, 塩, 砂糖, 小麦粉, レモン汁, ソースなど少量ずつのせた番号のついた小皿のセット)と見かけ, におい, 味を書き込むハンドアウトを受け取り, グループごと, 好きなようにそれぞれ書き表してみる。わからない表現は日本語を使う。	L, S, W
Group/individual	④ 各グループの発表の際に適切な英語表現を学習。 ⑤ ハンドアウトに書かれたいくつかのタイの食べ物についての英語説明と黒板の写真をしながら, タイの食べ物についての説明を聞き, どの食べ物のことを言っているのかカード番号と説明スクリプトをマッチさせる。	L, S, R, W L, S, R, W
Wrap-up	⑥ 答え合わせ, タイの代表的な食べ物の名前を確認。発音確認。	

(4) 1日の流れを教える授業から——「席を離れる」等ちょっとした普段と異なる環境を提供する案

トピック	⑦ 毎日の生活（タイの同年代の子どもの生活を知る）	
教材	タイの少年のインフォメーションカード (1枚のカードに1行か2行くらいでシンプルにかかれたもの) ハンドアウト	
到達目標	タイの子の日常生活について英語を使って情報を集め、レポートを書き、自分の生活と比べて考えられる。	
Linguistic form	What do you know about? He has/ is/ doesn't...	
Vocabulary	時間表現, 日常生活を表すのに使われる動詞	
活動	活動内容	技能
Warm up	① 制限時間以内で自分の1日を書き出す。 ② 日常生活に出てくる活動表現の確認。 ③ それぞれの生徒がタイの少年の生活について異なる情報を少しずつ与えられる。読めないものは教師に確認する。 ④ 制限時間以内で教室を自由に歩き回り、できるだけ多くの人からタイの少年についての情報を得る。ノートを取る際はカタカナ日本語を使っても良いが、質問も応答も英語で行う。	L, S, R R
Individual		
Individual/Pair work		
Individual/Pair work	⑤ 自分のノートを基に第一段階のレポートを作る。 ⑥ グループの中で情報交換。第二段階のレポートを作る。	R, W L, S, R, W
Group work	⑦ 教師のタイ少年に関する話を聞き、できる限りのノートを取り、または質問をし、最終段階のレポートを作る。 ⑧ それぞれのレポートの発表。気づいたこと、思ったことを話し合う。	L, S, R, W L, S, R
Group work		
Wrap-up	⑨ ハンドアウト（ワードリストと作ったレポート）の発音確認。	

最後に、これらのレッスンプランの中で、毎回ハンドアウトを用意し、答え合わせと発音確認で授業を終える形とした理由を述べたい。これはEFLの環境であり、週1回60分という非常に限られた時間の中で有効に学習を進めていく上で、重要であると考えている。その日の学習内容と発音を最後に整理し、何かしら学習記録として目に見えるものを残しておくことにより、次回の授業にスムーズに入る手助けとなるであろう。また、この学習記録を残していくことにより、1年間の授業を終えたときに大きな達成感も持つことができ、今後も英語に対する学習意欲を持ち続けてもらえるのではないかと考える。

V 結び

本稿においては、中学校以降で行われる英語教育を視野に入れ、幼児・児童に対する言語教育としての英語教育について Content-based approach の観点から具体例を挙げてそのあるべき姿を提案した。

Content-based approach に関しては、公立小学校でもその導入が検討されている。「総合的な学習の時間」自体が、「各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など総意工夫を生かした教育活動を行うもの」とされ、このような時間は今までの教科を中心としたカリキュラムの中では存在しなかった時間である。いわゆる「統合学習」または「教科横断型学習」などと呼ばれているカリキュラムに対する新しい考え方に基づいてできた時間である。各学校、また各教師は、子どもの要求に沿うべく創造的に授業を展開させることが求められており、その際コンテンツを中心に授業を進めることは大変効果的である。

小学校で本格的に英語教育を行うのであれば、子どもの第二言語習得の意味または成果を認知的、また社会的な発達とともに研究されなければならない。また、それ以降の英語教育との連携を考え、一貫したナショナルシラバスを制定する必要がある。これからも CLEC では、子どもたちとともによりよい英語教育について研究、実践を続けていく。

参考文献

- アレン玉井 光江 2004 『幼児・児童の日本語と英語の音韻識別能力の比較と英語の読み能力の発達に関する研究』平成14～15年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 安西 剛他 2001 『世界のこどもたちは いま』学習研究社
- Carle, Eric 1967 *Brown bear, Brown bear What Do You See?* Picture Lions
- Dr.Seuss. 1969 *The Foot Book Collins The Gingerbread Man* Addison-Wesley Publishing Company
- 黒川 光広他 1996 『滅び行く日本の動物たち 日本の絶滅のおそれがある動物』ポプラ社
- Lim, Marian 1999 *Abacadabra!!!* Addison Wesley Longman
- Maccarone, Grace 1995 *My Tooth Is About to Fall Out* Scholastic
- Snow, M. A. 2001 Content-Based and Immersion Models for Second and Foreign Language Teaching. In ed. by Marianne Celce-Murcia. *Teaching English as a Second or Foreign Language (third edition)*. pp.303-318.